

中国のほんの話(54)

内山完造『花甲録』

～日中両国の関係が最悪だった時代に築かれた友好の架け橋～

蔭山 達弥

日清戦争直後の19世紀末から、上海の町に日本人が住み出した一画があった。その地区は虹口（ホンキウ）と呼ばれ、以後、多くの日本人が住み着いた。その虹口のメインストリート（現在の四川北路）から奥に少し入った魏盛里に、店主内山完造が経営する内山書店があった。書店内の一室にはお茶を飲みながら誰でも気軽に囲んでできるサロンがあり、店主内山完造の人柄を慕って、多くの文人、文化人、学生たちが集まってきた。内山書店は日本留学生出身の中国の若者に対して新知識を供給している店なのであった。上海を訪れた谷崎潤一郎も内山完造に郭沫若、田漢らを紹介してもらった。その後、谷崎の紹介で佐藤春夫が来た。さらに金子光晴ら大勢の日本人文人が着たが、内山はその度に、中国人文人との交流の仲介をしている。郭沫若は国民党に捕らえられようとする、1928年2月、内山の手引きで上海を脱出、日本に亡命した。

内山書店が開店して十年目の1927年のある夏の午後、売り場には客の影がなく、内山夫人と中国人の店員がぼんやり座っていると、魯迅が店に入ってきた。「また此年魯迅先生が広東から上海に来られて、程近い東横浜路の景雲里23号に住まれたのであるが神ならぬ私はその魯迅先生とあんなにも親しく生活することになるなどは夢にも思わなかったのである。実は景雲里に住んでいられることはよほど後になって知ったのである。魯迅先生と私の店とのつながりは、景宋女士と結婚される以前からであったことは、「老板（ラオバン）僕は結婚したよ」と云われたので、私が「誰れとですか」と聞くと、先生は極めて簡単に「許とだよ、余り人々が心配してかれこれ云うから、結婚しないと反って気の毒だからネ」とあっさりと言えられたことから云うことが出来るが、実はさて何日からということは覚えて居らん。と云うのは先生は例によって例のごとく、飄々として煙草を吹かしながらはいつて来て本を見て買って、また飄々と帰られたのだが、始めの中のことであって別に改まって、「僕は魯迅ですが本を買いに来ました」と云うような自己紹介などは一度もなかったからである。先生が始めて云われた名前は魯迅ではなくて周樹人であった。それを聞いてわたしが「ああ貴方が魯迅先生ですか」と云うたことは今も覚えている。」（内山完造『花甲録』平凡社東洋文庫807）

大正2（1913）年、内山完造28歳、京都教



会の牧野牧師の紹介で、大阪北浜の参天堂の上海出張員と云うことで入社し、3月24日中国上海へ渡った。これが後年内山書店の主人として活躍する大陸での第一歩であった。「大学目録」の宣伝と販売拡張のために中国に渡った内山は、毎年11月になると一時帰国し、本社に事業報告をすると共に、翌年の計画を打ち合わせた。1916年1月、気立てがよく、美人の美喜夫人と結婚し、今度は二人揃って上海に行った。だが本拠を上海に構えたものの、夫は目録の販売で各地を回って忙しく、家を留守にしがちであった。そこで妻の退屈しのぎにと、玄関にみかん箱を並べてその上に本を置いたのが、内山書店のはじまりであった。大正6（1917）年のことである。

「内山完造氏は戦前上海で6冊の随筆集を著わし、敗戦帰国後、同じく6冊を執筆し、2冊を編集している。いずれも所謂「内山漫語」が中心で彼一流の中国に関する随筆、随想である。中国庶民の生活を彼の生活体験を通じてそれを日本人の生活に対比して、彼一流の社会正義に基づいて書きあげてゆくところに、私達読者には興味津津たるものがある。（中略）確かに彼の「漫語」は学問的、理論的ではない。しかし彼は肌でうけとめた中国庶民の生活を、何十冊という大学ノートにぎっしり記録しつづけ、それを、ネクタイの嫌いな、縛られることの嫌いな彼独特の、天衣無縫な言葉で綴っており、誠に面目躍如たるものがある。」（塚本助太郎『内山完造・中国人の生活風景』解題、東方選書3）

『花甲録』は日中戦争の最中に中国の文化人と交友し、日中の友情と信頼を築いた内山完造が自身の誕生から還暦までの記録を、時代と重ねながら綴った、自伝である。長く中国に住み、中国人の心を心として風雪を凌いで来た彼の遺稿集『中国人の生活風景』を読めば、中国人の生活を語る人としては内山完造以外には誰もいないことが分かるだろう。

かげやま たつや（教授・中国文学）